

第9回 優秀賞(銀の星賞)受賞作品

# 「うそつきと魂管理人」

東京都 お茶の水女子大学附属高等学校 2年 藤本 美紗子



賢治のまちから  
**高校生★童話大賞**



優秀賞〈銀の星賞〉

## 『うそつきと魂管理人』

東京都 お茶の水女子大学附属高等学校 二年 藤本 美紗子

月が出ている。

濁りのない夜空に、ぽつかりと白い月がうかんでいた。あまりにも澄んでいて、真っ黒で、まるでつくりものみたいだ。

一人の少年がベンチに身を投げ出すように腰掛け、背もたれに頭を乗せて空を見ていた。

「おれは。」

なにをしているんだろう。どこにいるんだろう。わからない。さつきまでなにをしていたんだろう。思い出せない。考えることがめんどくさい。頭がぼーっとする。すこし、からだもだるいのだ。

少年は、キャップ帽をかぶりなおすと目を閉じた。

どくん、どくん、どくん。ここはなんて静かなところだろう。自分の心臓の音がいやに目立つ。

どくん、どくん、どくん…。心臓の音にあわせて、意識がふわふわと上がつたり下がつたりを繰り返す。眠りにつく一歩手前のような甘い心地よさとほんのわずかな緊張感がからだを支配する。

パサリ。

帽子が地面に落ちたことに気づいて目を開けると、目の前に人の顔があつた。正しくは人の顔を模した仮面のようなもので、それが人ならば目と口があるであろう箇所に三つの穴が、少年をとらえていた。

「おや、生きていましたか」

「うわああ！」

少年は仮面から飛びのいた。心臓がぱくぱくしている。

よく見れば、仮面の下には胴体があり、人間らしい大きさをしている。

ただ頭から足の先まで真っ黒な布か何かで覆われていた。闇に溶けるその

身に張り付いた白い仮面が、じつとこちらを見つめている。

逃げなくちや。そう思つたがベンチから立ち上がりがない。足が動かない。

仮面男（男かどうかわからぬが）が怪訝な面持ちで文句を言つた。



「失礼な方ですね。人の顔を見るなりゴキブリを見たかのような声をあげるなんて」

まあ年端としはもいかないヒトの子供でさえ震えあがるほどのこの私の美貌びぱうの前では仕様のないことですが、と続ける。

美貌、だと? 不気味のまちがいではないだろうか。

「なんという嘆かわしき事態……! 今時の人間の子供は、純白に輝くマスクに滑らかに描かれたカーブ、寸分の狂いなき配置による完璧なバランスを織りなす三角比によつて生じるこの私の美しさが理解できないとは……」

仮面男は心底がつかりだといわんばかりにその身をよじつて嘆いた。

自分のことを自分でほめちぎる人はナルシストつていうんだって、聞いたことがあるぞ。

こいつのおかげで眠気はさめ、鈍にぶっていた頭の回転はすっかりよくなつていた。

「……あの、聞きたいんだけど」

「はい、マスクの美白を保つ秘訣ひけつですか? いいですよ、お教えしま……」

「ここはどこだ?」

この際、目の前の怪しいナルシストが何者かはどうでもよい。もう夜遅い。早く家に帰らないと、母さんにこつてりしかられてしまう。

仮面男は「人の話は最後まで聞くべきです」と不満げであつた。

「どこ、と言われましても困りますね。『ここ』という場所には『ここ』という表現しかございませんので。」

そして、ああ、となにかひらめいたようにいった。

「あなたたち人間が暮らす世界を生とするなら、死んだ人間の魂が一時的に集まる場所、とでもいいましょうか。」

あれ、今こいつなんていつた? 少年は仮面男の言葉を一語一語反芻はんすうする。

死んだ、人間の、魂が、集まる?

間違いない。仮面男はそういつた。

……ふう。

どうやらおれは疲れているみたいだ。言葉の意味自体はわかるけれど、こいつのいうことが理解できない。頭がうまくはたらかないのだ。黙つている少年に向かつて、管理人はさらに続けた。

「あなたは、私に殺されたのです。」

「は!?」

なんて気味の悪いことをいうやつだ。冗談にもほどがある。



「失礼、言い方が無粋でしたね。それでは改めて言いますが、私があなたを『いなかつた』ことにしたのです。」

だめだ、こいつはまともな話ができるやつじゃない。そう思つた少年は、仮面男のことばを無視してその場をはなれようとした。けれど、もし今この目の前の得体の知れない相手に背を向けたら、ひといきで喰われてしまいそうな、えも言わぬ恐怖がからだをかけめぐつた。つま先から頭の皮膚までもがぞわりと粟立つ。

「申し遅れましたが、私は魂管理人と申しまして、この地域一帯のこの世とあの世の魂の往来を見守る者でございます。」

そういうて自称魂管理人は上体をたおし、うやうやしく一礼した。

この世とあの世の魂を見守る…？ いよいよ信じられない。

「お、お前は、さつきからそんなうそをついて、楽しいのか！？」

「うそつきはあなただ。」

管理人は静かに言い放つた。そして一句一句区切るようにくりかえした。

「あなたは、大変うそつきだ。」

「おれはうそなんかついていない！」

「ライアーライアー！」

突然鋭い声でいわれて身がすくむ。

「…覚えていませんか？ 昨日、例の女性に言つたこと。」

管理人は再び淡々とした調子で続けた。

「じょ、女性？」

「ほら、あなたが好意をよせている、ロングヘアの、可憐で清らかそくな。」

「ああ、あいつか…！」

いつてから、しまつたと思つた。

「ほう、やはり君はあの女性に惚れていますね。」

管理人はどこか嬉しそうに、からかうかのように背筋をのばして見下ろしてきた。

「ちがう！」

あいつというのは学校で同じクラスのサラという女子で、気が弱くて泣き虫で、いつも誰かの後ろに隠れているようなやつだ。休み時間にはもっぱら本を読んでいるようなやつだが、窓辺に座つたあいつの少し茶色がかった髪が長くてまつすぐで、陽の光に照らされてきらきらして、きれいだなど思ったのを覚えている。自分は普段本なんかめつたに読まないけれど、



あいつの読んでいる本はなんていう本なんだろうな、と気になつたものだつた。

「ちがう！きれいだからきれいだと思つただけだよ！気になつただけだし！」

「主語が抜けていますよ。まあまあ、落ち着いてください。お、落ち着かなくさせたのはだれだ！」

「なんといいましたか？」

「話を進めましょう。今一度お聞きしますが、あなたは最後に、その女性になんといいましたか？」

えつと、最後にあつたのはたしか…。教室で、クラスの女子がいて、サラがいて、女子が「サラって、あんたのことが好きなのよ」といつてきて。たしか、驚くやら顔が赤くなるやら、気が動転したおれは…。

「『おまえなんかだいきらいだ！バーカ！』」

「そのとおり！まさしくその稚拙<sup>ちせつ</sup>で頭の悪<sup>く</sup>そうな暴言<sup>ぼごん</sup>こそが正解です！」

いますごく失礼なことを言われた気がしたぞ。たしかに、そういった直後「あ、やつてしまつたな」と思った。そういえば、それからあと覚えがない。

「それで…、それがなんだよ。」

「彼女、泣いていましたよ。」

「…。」

「どうか、泣いていたのか。」

「まつたくあなたは、彼女が嫌いだなんて大うそで彼女を泣かせたりして…」

おれが、泣かせたのか。そんなつもりじゃ、なかつたんだけどな。

「あなたは大変なうそつきだ。うそをつくのは悪いことだ。悪いことをしたらそれ相応<sup>そうおう</sup>の償い<sup>つぐな</sup>をしなければいけない。それ相応の罪を受けなくてはいけない。実にシンプルなことでしよう？」

違いますか？というように管理人に見つめられる。ふと氣をぬけばすいこまれてしまいそうだ。

「ほんとうに、おれは死んだのか…？」

「ええ。正式で自然な『死』ではないので、正確には『消えた』という方が近いでしようけれども。」

「もう、みんなのところへは戻れないのか？」

「いいえ。」

そのことばにおれは食いついた。

# 賢治のまちから 高校生☆童話大賞



「戻れるのか！」

「ええ、戻れないというわけではありませんよ。」

「どうやつたら戻れるのか！」

「もとの世へ、戻りたいのですか？」

「あたり前だ！」

「戻つて、どうするのですか？」

「聞かれて、答えにつまる。」

もしみんなのところへ戻れるのなら、まず、サラに会いたい。会つて、何をいうべきかわからないが、このままなにもかもなくなつて、終わつてしまふのはいやだ。でも、サラはもうおれとは会いたくないかもしれない。それでも…。

おれは黙つてしまつたので、管理人は困つたように続けた。

「…まあ、いいでしよう。あちらには、私も少し用事がありますからね。」

「ほんとうか！」

おれはぱつと顔をあげた。すると管理人の顔が間近にあつた。

驚いて声をあげる間もなく管理人の背後から青白い光が溢あふれ、そのまましさに思わず目をつむる。きつくふさいだ目の奥まで光が入つてくる。管理人の声が非常に遠くで響いた気がした。

「それでは、私が導いて差し上げましょう。あなたのいた世界へ。」

そして視界が白で埋め尽くされた。

\* \* \* \* \*

「着きましたよ。」

移動は驚くほど早く、一瞬のできごとだつた。

管理人の声に恐る恐る目を開けると、灰色のコンクリートにぶちまかれた絵の具、グリーンのスプレーでなぐり書かれた『I LOVE YOSHIKO』の文字。車道に止まる車を見れば、赤信号をにらみつけるドライバー。まちがいない。そこは学校の通学路のガード下だつた。

「ほんとうに、ここは？」

「ええ、時間で言うとまさに私があなたをあちらへ連れて行つた直後の、あなたのいた世の中ですよ。」



そこはたしかに毎日通っていたはずの場所なのに、どこか他人めいてみえた。

すると、数人の女子たちがこちらへやつてきた。離れたところからでもその楽しそうな笑い声が聞こえてくる。なんとその中にサラもいた。

あいつ、あんなふうに笑つたりしゃべつたりするやつだったのか。

そんなことを思つてゐるうちに女子たちが近づいてくる。よく見るとサラの目がほんのり赤い。

ああどうしよう。まだ何をいうか考えていないので。まずなんて話しかけたらいいんだろう。「やあ」はなんだかさわやかすぎる。「あの」じゃ他人行儀みたいでおかしいな。「よお。」いいかもしない。よし、「よお」でいこう。

しかし、サラたちは少年の前を素通りしていった。

「お、おい！」

少年は遠ざかっていくサラたちの後姿を見ていた。  
横からあきれたように管理人が口を出してくる。

「彼女たちはわれわれの姿は見えませんし、もちろん声も聞こえませんよ。」

そうだったのか。無視、されたわけじゃないんだな。

管理人は続けて、「いいですか」と背筋をのばす。

「私たちはこの世界では実体をもたないものとして、この世のありとあらゆるものに対して不干渉が大原則であり、絶対の約束ごとです。」

「ふむ。」

「先ほどもいいましたが私たちのからだは私たちにしか見えません。今私たちが存在するこの空間には、実体のある生き物のように皮や肉や骨が存在することなく、他の空間同様に空気の粒子が漂<sup>ただよ</sup>っています。」

「…ふむ。」

「よつて、私たちはこの世ではどこにでも存在できるし、どこにも存在しない存在なのです。」

「ふむふむ、なるほど。よくわかった。」

管理人が疑い深げにこちらを見ているが、いつたい誰を見ているのだろう。

こいつの言つことはだいたいわかつた。おれたちは、いるけどいらないらしい。ふむ、われながらシンプルかつパーソナリティな解釈だな。でもそれでは…。



「意味がないんだよ！」

サラに会つても、話すこともできないじゃないか。

「それならば。」

そういった管理人の口から、にゅるにゅると白いものがはいってきた。するとみるみるうちに人のかたちになり、でんとおれの前に横たわった。髪も服もないが、今にも目が開きそうなそれは、ひどくリアルにつくりこまれたマネキンのようだった。

「テンポレリボディといつてですね、いわゆる仮の魂のいれものの様なものです。」

管理人に促されままにテンポレリボディに自分のからだを重ねる。

すると、背中にアスファルトのひんやりとした感触を感じた。少年はゆっくり立ち上がりてみる。なぜか膝がぱきっと鳴った気がした。不思議なことにちゃんと服も着ているし、髪の毛もある。さつきまでただのモノだったのが、自分が中に入ったとたん、命が吹きこまれたみたいだ。何度も足踏みをしたあと、あたりを歩いてみた。ふむ、どこにも不調はない。が、やけに視界が高いのは気のせいだろうか。

「子供用のボディなんて持ちあわせておりませんので、それで我慢してください。中肉中背。年齢にして三十代後半ってところですかね。」

……なんだって？

「これで例の女性ともお話できるでしょう。」

管理人はお見通しだといふふんといった。そして「ただし」と続ける。

「こちらからこの世に干渉できるということは、こちらも干渉されるということです。ものに当たれば衝撃ショウゲキを受けますし、撃たれたら死んでしまいます。」

「くれぐれも、気をつけてくださいね」ということばをきくかきかないかのうちに管理人の首もとに飛びつく。ぐえ、とかえるのような声がしたが気にしない。そして叫んだ。

「おれだつてわかんなきやしそうがないだろ、このひよつとこ仮面！」

\* \* \* \* \*

「どうです？あなたのいた、あなたのいない世界は」

「……なかなかだよ。」

あまりしゃべると頬のかすり傷が痛い。

おれたちは、通学路から少しはなれたビル街を歩いていた。

さつきはひどいめにあった。かわいい呼び名で呼んでやつただけなのに、地の底からはいあがってくるかのような声で「よくも、私（のマスク）を愚弄しやがって貴様……！」という奴の目は本気だった。

まったく冗談の通じないやつは困ったもんだ。そう思ったがこれ以上話を広げたくないでの、胸の中へしまつておく。

サラに会うという望みを絶たれたおれは、特に行くところもないでの、管理人の用事につきあうこととした。いつたい何をしにここまで来たのやら。

ふと、ショーウィンドウに映った自分の姿が見えた。濃紺のスラックスにブルーのポロシャツ。典型的な休日のお父さんファッショնだ。その表情ににじむあきらめにも似たどこか冷めたような色は、このボディによるものか。それとも自分自身か。

急に電気店の前で管理人が立ち止まつた。その商品のひとつを見つめながら問う。

「これはなんですか？」

「テレビだよ。知らないのか？」

「ええ、はじめてみました。」

店頭に大型のテレビや最新型の薄型テレビなどがディスプレイされている。管理人の視線の先は、夕方のニュース番組だった。

「——爆発物は公園中央のゴミ箱内に設置されていたもようで、先日のものと同組織として捜査を進めて……」

近ごろ、物騒なニュースばかりだ。おとなたちはみんなニュースを見ろというが、だれかが殺されたとか、政治家がわるいことをしたとか、いつもでも気持ちが暗くなるようなニュースばかりがトップにでていて、いやになつてしまう。

すると、ふいに管理人がつぶやいた。

「不安なのでしょうね。」

「え？」

「この方たちです。」

「そりやあ、まあ、そんなんじゃないか。」



この方たち、というのは現場付近に暮らす人たちのことだろうか。  
「不安を抱えていると、時に生き物は攻撃的になります。」

そのことばを聞いて、ああとうなずく。

テロなんて自分には関係ないと思っていたし、正直テロをやる人間の気持ちなんて考えたこともなかつた。

「この世の不安のもとは、なんでしょうね。」  
ね、と問いかけるように…。

「…さあ。」

不安か。

おれの今一番の不安は本当にこのまま死んでしまうのかということだ。  
けれど、そういうことじやないんだろう。

世の中にはもっと大きな不安が渦巻いているんだよ。それこそ自分  
のそれとは比べものにならないくらいの。さあ、そこでおまえはどうする?  
管理人の目がそう言っている気がして、なぜだか怖くなつた。この沈黙す  
ら恐ろしい。

「お、おれは。」

しかし、すべてをいい終えることはできなかつた。

ズガアアアアン!  
すさまじい轟音ごうおんがあたりに響いた。

一瞬、通りにいた人すべての時がとまる。

「な、なんだ!」

とたんに、隣のビルの入り口から一気に人が吐き出されてきた。  
人々のわめき声が飛び交う。悲鳴が舞う。すなばく砂埃さなづりが散る。

「爆発だ!」

「テロか!?」

「警察をよべ!」

あつという間にビルを取り囲むような人だかりができた。

どうやらビル内で爆発が起こつたようだ。  
「テレビでいつてた、テロつて…。」

不安顔なおれとは対照的に管理人は冷静だ。

「いや、このくらいはニュースを聞いての真似まねごとでしよう。犯人もすぐ  
に捕まるはずです。」

きやんきやん!

どこからか犬のなき声が聞こえた。



「おい、犬がいるぞ！」

上を見上げると、ビルの屋上近くの階から犬が顔をのぞかせていた。

「マリリンちやああーん！」

近くにいた小太りの老人が叫んでいる。あのじいさんどこかで見たことがあると思ったら、この前の選挙で当選した新しい区長だ。「ともに歩む未来」とやらを掲げて、動物を大切にするとかなんとかいっていた。

そのじいさんがお付の者と思しき黒スースの男たちに抑えられるようなかたちでわめいていた。

「なんとか助けにいかんか、お前たち！」

「お言葉ですが万次郎様、爆発による火災が発生した今、ビル内に立ち入り、犬を所持、帰還は困難を極めます。誠に勝手ながら、待機が最善と判断いたします。」

「犬ではない、マリリンと呼ばんか！」といったのに対し、男は「申し訳ございません」と口だけの謝罪を述べた。

「さて、ひとつお願いしたいことがあるのですが……おや？」

管理人は少年にいったつもりだつたが、そこに少年の姿はなかつた。騒ぎのする方を見てみれば、万次郎に向かつて一直線に走つていく者がいた。

「こんのやろう！」

背格好は中肉中背、濃紺のスラックスにブルーのポロシャツを着た男に横から殴られてふつとぶ万次郎。

すぐさま黒スースたちが寄ってきた。

「なにをする！」

「うるさい！」

少年は怒っていた。

「そのじいさんが手に持つてるのはなんだ？てめえのかばんじやねえか！お前は犬つころより金が大事なのかよ！お前らは、犬つころを見殺しにするつもりだったのかよ！」

瞬間、頬にはしる衝撃。

視界がものすごい速度で反転し、全身がアスファルトに打ち付けられる。ほこりと鉄のにおいを吸い込み顔をあげた少年の目に、黒光りする革靴が写つた。

「ついいつて…」

「一発は一発だ、中年。」

頭上から降りかかる声は、録音テープのように淡々としていた。

「……じいさんのガードマンか。お前がじいさんのかわりに犬っこを連れてきてやればいいだろう！」

「私どもの仕事は万次郎様をお守りすることだ。犬を守ることではない。」  
おれは言葉にならない怒りがわいた。じいさんもじいさんなら部下も部下だ。

「ふん、見てろ！」

そういううどビルの中へと走って消えていった。われに返ったように動き出した警官に「おい、立ち入り禁止だぞ」といわれたが、「うるさい！」と跳ね飛ばしていった。

ビルに入ると階段を一気にかけのぼる。管理人がいうにはこのからだはただのいれものだというのに、殴られれば痛いし走れば息も切れる。こんなところまでリアルに作りこまなくとも良いのに。

ドアを開けるとそこは火の海だった。ここまで来る間にこんなに火が広まっていたなんて。

視界がオレンジに支配される。口を開けても入ってくるのは熱気ばかりで、息が苦しい。肺が焼けそうだ。酸素が足りない。

「犬っこは……！？」

炎の少ないほうへ少ないほうへと進んでゆく。

「どこだ！？ わんこやろう！」

キャン！

まだ火のまわっていないフロアの隅に毛玉のようにかたまっていた犬が、こちらをみつけてしつぽをふつた。ゆれる茶色い尾が一、二、三……。

「お、おい、三匹もいるなんてきいてないぞ！」

すると、すぐ横の窓がごんごん叩かれた。消防隊がヘリで助けに来たのだ。鍵をこわしてやれば、まどは簡単に開いた。

「旦那！ 加勢にきたぜ！」

消防隊かと思つた男は、Tシャツにデニムパンツとやけにラフないでたちだつた。

「さつき、あのじいさんを投げ飛ばしてくれてスカッとしたよ。それからおまえさんがビルへ入つていくのが見えてな、いてもたつてもいられなくなつてこいつを飛ばしてきた。」

こいつ、と言いながら、窓の向こうに見えるグレーの機体をちらりと見やる。



「…おっさん、あんた何者なんだ？」

「俺か？」

「そういって男はニヤリと笑う。

「俺はしがない団子屋の店長さ。」

「悪いが今はこれで手一杯だ。もう一度ここへ戻るから、それまで…。」

「いや、その必要はない。」

男のことばは少年によつてささえぎられる。

「なにいつてんだ！おまえさんも早く逃げないと危険だぞ！」

「なあに、心配するな。おれには考えがあるんだ。とにかく、一般の人たちがビルへ近づかないようにしてくれ。いいか、ヤジウマ一匹近よらせるなよ！わかつたら犬つころどもを連れてさつさと退避を！時間がない、大至急だ！早くいけ！」

「了、了解！」

少年の気迫におされて男は思わず返事を返す。

男が去ったあと、少年は三匹の犬がいた壁際を見つめていた。犬にかくれて気がつかなかつたが、そこには、黒いケースにスプレー缶のようなものや赤白黄色などカラフルな導線がわやわやと詰められていた。その中のうちの導線のひとつにつながつたデジタル表示の時計の文字盤は、時を刻むことなく、その数字は一秒一秒さかのぼつていく。

絵に描いたような時限爆弾だ。

「これはこれは、爆発でもしたら大変なことでしょうね。」

どこからともなく現れた管理人が、まるで今日もいい天氣ですねというような調子でいった。口外にまあ私たちには関係のないことですがということばをにじませている。

「気づいていたのですか？」

「…ああ。」

男が犬を連れて行こうとしたとき、いやなものが見えた気がした。それをしつかり見据えた今、「いやなもの」は「爆弾」に具現化した。こんなものが爆発でもしたら、さつきのように火事ごときではすまないだろう。それでなくともこんな窓の近くでガラスの破片が飛び散れば、たくさん人の命が危ない。

「ところで、どうやつて脱出するつもりですか？あと十分もありませんよ。…まさか、爆弾を止めるなんて言い出すのではないでしょうね。」





十分ではさつきの男の救助も待っていられない。

ライナーはふんと鼻を鳴らす。

「言つただろう？おれはうそつきなんだ。」

そういつて眉間にしわをよせたまま、目を細めた。あと九分。さて、どうしようか。注射の順番待ちをしている時のように手足がぶるつとした。これが武者震いとかいうやつか。

そんなおれのニヒルな笑みを見て管理人はいった。

「目にごみでも入りましたか？」

そしてわざとらしくため息をつきながらいう。

「まつたく、あなたは大変なうそつきだ。加えてバカだ！」

悪かつたな！バカで！

「策はなし。状況は最悪。他のいのちより自分の財を重んじた愚か者に憤り、そのいのちを救うためだけに自ら危険に飛び込み、そして自分はといえば得意げに死に向かっている。考えなしの直情型で、おひとよしとはなんともたちが悪い。」

そして心底楽しそうな声で続けた。

「——本当に、大変なバカだ。」

おれは爆弾の前にどつかと腰をおろす。

えつと、前に父さんとテレビで見た映画でこんなシーンを見たことがある。白と黒の導線を前にした男が、えいと一本の線を切る。止まる時限爆弾。無事に戻った男に女が「ねえ、どうして黒をえらんだの？」と聞く。そして男はキザつたらしくこう答えた。「あの時…キミの漆黒の瞳を思い出してね」……だいたいこんな感じだったはずだ。（たいていの人は瞳の色は黒だと思うが、そういうのは「触れちゃいけないこと」なんだろう）

すぐ横でおれを見下ろしている、黒ずくめに白い仮面の管理人を見た。白い導線ならあるが、なんだかこれを選ぶ気にはまったくならない。

「震えていますよ。」

「ふ、震えない！怖がつてもいいぞ！」

これは武者震いだというのに失礼なやつだ。

「できもしないのに見栄と理想で動くなんて……怖いのでしょうか？」

「怖くなんかない！どうせおれはもう死んでるんだ！覚悟ならできてる！」

「ライナー。」

「なんだよ！？」



「……覚悟なんて、できるわけがないでしよう。」

急に管理人の声音がスッと低くなつた。

「そう口にしながら、心のどこかで誰かが助けてくれる、と思つてているのでしよう。助けてほしいと、生きたいと、思つてはいるのでしょうか。」

「……そ、んなこと……！」

「それでいい。」

おれの言葉は管理人によつてさえぎられた。

「それでいいのです、ライア一。生にすがりつきなさい。いさぎよい潔い最期が美德だなんて、いつの時代のどこの国の人間が言ったのだか知りませんがね。そんなもののウジの毛ほども美しくない。」

いいことを言つてはいるのかもしねないが、『ウジの毛ほど』という表現が美しいかどうかは疑問だ。おれは思ったが、黙つていた。

「どんなにひどい目にあおうとも、ひもじくても、絶望しても、汚らしくても生きなさい。きゅうち窮地おちいに陥つて、生きる見込みが一パーセントなら、その一パーセントを二パーセントに、二パーセントを二〇パーセントにするための、最善の道を考えなさい。考えるのをやめたら、死ぬと思ひなさい。」

そして、「意地汚いのは人間の得意技でしよう？」と首を傾げる。目があればウインクをしていたことだろう。

「意地汚く生きることにしがみつく人間の姿は、大変美しいのです。  
……まったく、このどこまでも怪しい魂管理人とやらは、たいした美的センスだよ。」

「さてここで問題です。」

そう言つて管理人はぴんと背筋をのばす。

「今、あなたにとつて最善の道とは何でしようか？」

おれはごくりとのどを鳴らす。

生存確率の低い場合の『最善の道』——その道以外は死。今自分たちがいるのはビルの四五階。

あと三分ほどで爆発する爆弾。

ビル内には管理人と自分以外にいない。

爆発すれば人々の命が危ない。

導き出される答えは——ひとつだ。おれはフツと笑つた。

「なんとかして爆弾をとめる！そして窓から飛び降りかつこよく着地し、みんなから褒めほめたたえ称えられる！」

我ながら恐ろしいまでに完璧だ。少年はこれでどうだ！という勝ち誇つ



た表情を浮かべている。管理人の表情にスッと黒い影がさしたことにも気がつかない。

「まったくあなたは…」

管理人はその長い身を反らせてひび割れた天上を仰ぐ。そして、反りかえった反動を始めとする自分にかかる全力を少年にぶつけるかのように、「本物だ！」

頭突きをした。

「まったく、信じがたいよ。」

管理人は姿勢を正し、コフンとため息をついた。

「今時の人間に、君みたいなバカがまだいたなんてね。……けれども、まあ、そのようなバカだからこそ手を貸して差し上げたくなるのでしょうかねえ。」

そしてフロア内をぐるりと見回し、目の前の爆弾の数字を見る。00:48、00:47、00:46……。

「はてさて、どうしたものでしようか。」

首をかしげた。

「私どもは、この世界のありとあらゆるものに対しても無干渉が大原則なのですけれども…」

足元で仰向けに転がる少年を見やつた。先ほどの頭突きを見事に食らつた少年は、しつかり白目を剥いている。

「申し訳ありません、ライアーアー。…ただ、素顔はあまり見られたくないのです。」

カラーン。

そして、仮面が落ちる音が響いた。

\* \* \* \* \*

気がつくと、おれはシチューを食べていた。

「おいしい？」

目の前のイスに座って同じように夕飯を食べている母さんが、おれにた

ずねる。

口の中にクリーミーなうまいが広がる。にんじんは嫌いだけど、母さんのシチューのにんじんだけは食べる気になる。

「うん、うまい。」

おれがそう言うと、母さんはそっけなく、しかし嬉しそうに「そう」と言つた。

テレビではちょうどニユースが始まつたところだ。画面にはビルが爆発するシーンが流れていた。このビル、あそこのじゃないか――。

「ああ！爆弾！」

それに、おれ……。

「生きてる！」

壁にあつた鏡には、興奮氣味の十代そこそこの幼い少年の顔が映つている。間違いない自分だ。そしてここは自分の家で、母さんのシチューを食べていた。

おれは戻ってきたのだ。

急に叫びだしたおれを見て母さんは目を丸くする。

「どうしたの、あんた？」

キヤスターが事件の詳細を述べたあと、軽傷者が数人ですんだことが不

幸中の幸いでした、としめくくつた。

そうか、管理人のしわざか。

黙つてテレビを見つめて放心状態のおれをさらりと流すように母さんがいつた。

「そうよ、生きてるつてすばらしいことなの。だからしつかり味わつてご飯食べて、さつさと宿題やつちやいなさい。」

「う、うん。」

それからというものの、ずっとうわのそらだつた。

夕飯を食べ終わつて風呂へ入り、歯を磨いてトイレをすませたら、自分の部屋のベッドにぼすんと倒れこむ。

今日は、ひどくつかれた。ひとりでにまぶたが下がる。まぶたの上に眠気がのつしりと横たわつているせ이다。

前も、こうやつて目をとじていたところに、あの魂管理人とやらが現れたのだ。そういえばあいつはどうしているだろう。ふと電球の光がさえぎられた気がして、そつと目を開けた。眼前三センチに迫る、忘れもしない白い仮面に三つの穴。



「おや、起きていましたか。」

「うわあああ！」

「あれ、これってデジャブとかいうんだつけ。」

「あいかわらずですね、ライアー。」

「ど、どうして普通に出てこられないんだ、お前は！」

管理人は肩をすくめるような動作をした。

「そうそう、少しお願い事があつて参りました。」

「お願い事？」

「そういえばこの世に用事があるといつていた。」

「『こんばす』、というものをご存知ですか？」

コンパスとはあの円を描くときに使う文具のことだろうか。まさかこの口からそんなことばがでてくるとは思わなかつた。

「持つてるぞ。今は学校にあるけど。」

「お願ひします！それを私にゆずってくださいませんか！」

ずいと近寄られ、反射的にのけぞる。

「い、いいけど！」

「おお、あなたはなんて良い人だ！感謝の極み！」

管理人は黒い布のようなもので覆われたからだを伸び縮みさせながら、その場でくるくる回つていて。よっぽど嬉しいのだろうが、こちらから見れば宇宙人と交信しているかのようでとても不気味だ。（そもそもこいつ自体宇宙人と似たようなものだけれど）

「なんで、コンパスなんか欲しいんだ？」

「それはもう！『こんばす』の描く円の美しさといったら！話に聞きその姿をひとめ見たときより、ぜひとも手にしたいとかねがね願つていたのです！これこそをまさにひとめぼれというのですね！あなたと同じです！」

「サラとコンパスを一緒にするな！」

おれのこの純粹な気持ちと、こいつのわけのわからない趣味を一緒にしないでほしい。

「それで、学校にあるから今は手元にはないんだけど、どうすればいい？」  
「そうですね、宅配便でお願いします。あ、速達でなくてけつこうですので。」

「なるほど宅急便でいいのか。」

「便利なものだな。」

「まったくです。」





そこで、おれは一番気になつていていたことを聞いた。

「……どうして、おれを助けてくれたんだい？」

管理人はこちらに向き直つていった。

「君を死なせてしまうのは、罪な気がしてね。」

美しい私が罪人だなんて有り得ないだろう、と続いた言葉は面倒なので聞かないでおく。

「今時君のようなバカは希少種なのです。個体数の少ない生き物はいたわらなくてはいけません。そのくらいの常識はわきまえておりますよ。」

なにか、今失礼なことを言われた気がしたが、海のように広い心で受け止めてやる。

「そうか、ありがとう。」

すると、管理人ははつとした。ただならぬ雰囲気に不安を感じてたずねる。

「どうした？」

管理人はいつになく真剣な面持ちで言つた。

「私が罪人なんてありえない、と言いましたが……」

まさか、おれを助けたことで、こいつがひどい目にあうのかと思うと急に不安になつた。

「私のこの美しさがすでに罪ではないでしようか……？」

……ああ、こいつの心配をしたおれは本当にばかだ！

「まったく、心配してこんなに損をしたと思ったのは生まれて初めてだ！」

おれが叫ぶにもかかわらず、管理人はふふと笑つた。

「くれぐれも長生きしてくださいね。」

「言われなくても、するさ。」

管理人の無機質な目が、嬉しそうに細められた気がした。

「ややつ、そろそろ部長のお昼寝タイムが終わつてしまふ。」

「仕事中でしたが、自主的に休憩をとつてその合間に来たのでね」と愛らしく首を傾ける。

あくまでもサボつたとはいわない管理人を見送る。

「それでは、失礼いたします。」

管理人の身体が薄くなつて透けていく。

「あつ、言い忘れましたが、『こんぱす』は、シャーペン型ではなく鉛筆

型にしてくだ――」

パチン。

言い終わる前に消えてしまった。



ところで、送ってくれ、と言われても、一体どこにどうやつて送れというのだろうか。頼まれてから長い間送らなければ、またこちらへ催促さいそくにくるだろうか。しかし、なぜかもうあのふざけた魂管理人と会うことはないだろうな、と思つた。

再び上半身をベッドへしづみ込ませる。包み込む布団の感触が心地よい。そうだ、明日まずサラに謝ろう。そして、なんの本を読んでいるのか聞いてみようと思う。

ほんやりとそんなことを考えながら眠りについた。月明かりが少年の部屋をやさしく照らしていた。